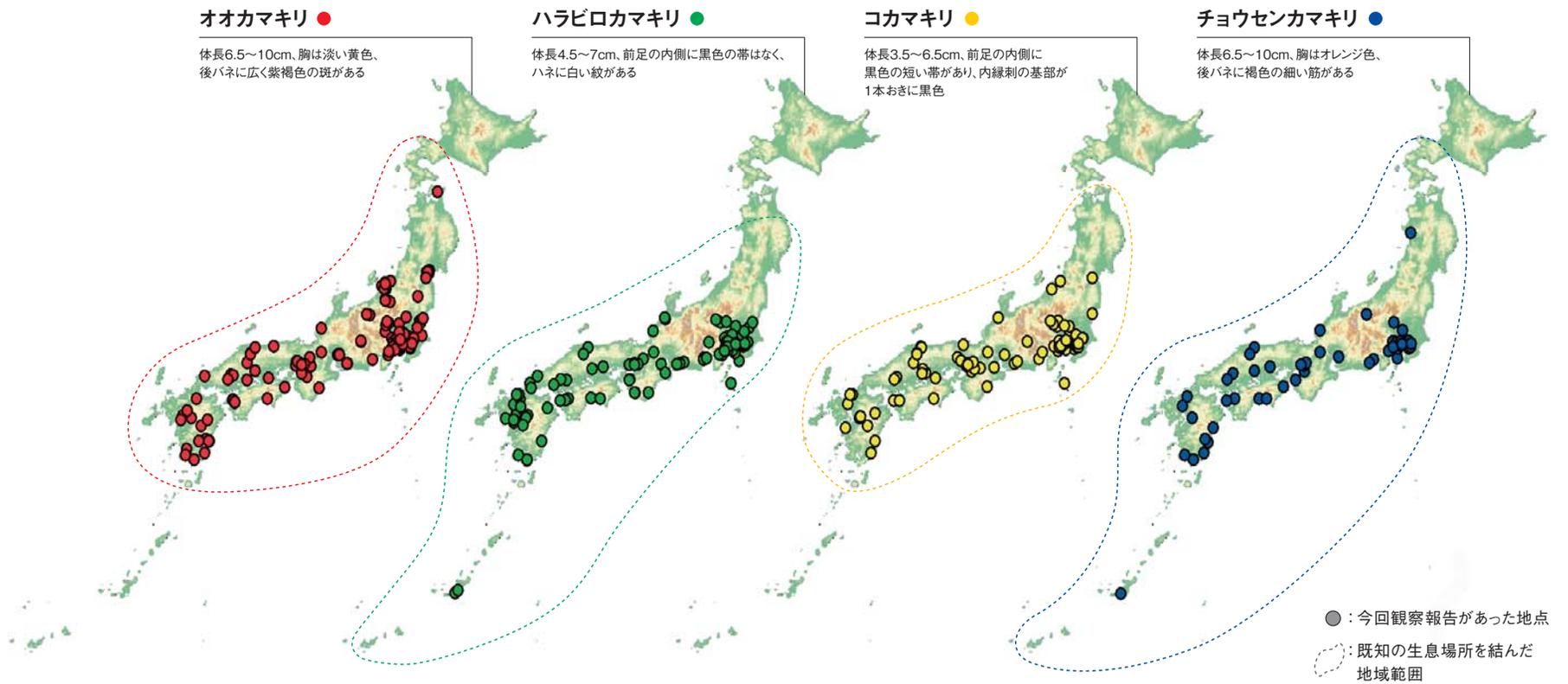




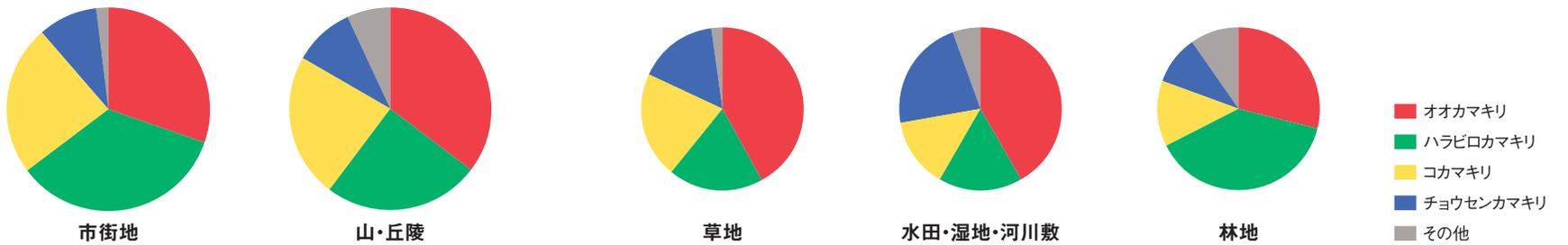
# カマキリの全国分布を見てみよう!

カマキリの種類が見分けられたもののうち、観察数が多かった4種を全国分布図に示しました。いずれの種も、北海道・東北からの記録がほとんどありませんが、これはカマキリが南方系の昆虫であることに加え、これらの地域からの参加者が少なかったためと考えられます。なかでもハラビロカマキリやコカマキリなど、中小型で、林縁などの見つけにくい場所に生息する種では、その傾向が顕著でした。それぞれに、これまでに

知られている生息場所を囲んだ地域範囲を重ねたところ、分布が大きく異なるものはありませんでした。そう言うと目新しくないと感じるかもしれませんが、詳しい分布が明らかになっていないカマキリにとっては、今回の観察情報の一つ一つが新記録といっせつつかえないでしょう。また、今回これだけの分布図が示されたことが今後の新たな情報の掘り起こしにもつながり、カマキリ研究において意義深いものといえます。



## 環境別に見られたカマキリを比べてみると



カマキリは、海岸の草地、街中の植え込みから山間の林地までさまざまな環境で見られます。おそらく、餌となる小さな昆虫が生息していれば、植生や環境にはあまり左右されない生き物なのでしょう。

上の円グラフに、市街地、山・丘陵、草地、水田・湿地・河川敷、林地の5つの環境で見られたカマキリの種類とその割合を示しました。そのうち、市街地と山・丘陵という対比的な環境を比べてみると、一見あまり大きな差は見られません。ただし、市街地では山・丘陵よりハラビロカマキリの割合が増えています。ハラビロカマキリは樹上性のため、この結果はちょっと意外に思いますが、おそらく山・丘陵では発見するのが難しかったのでしょう。一方、山・丘陵では市街地より「その他のカマキリ」の割合が増えています。これは、山・丘陵は市街地に比べて環境が多様なため、くらしぶりが異なる複数のカマキリが生息できることを表しているのでしょう。

また、草地ではコカマキリ、水田などの水辺ではチョウセンカマキリ、林地ではハラビロカマキリやヒメカマキリ(「その他」の多くを占めている)と、環境ごとに見られる頻度が高い種類が異なります。これらのことから、オオカマキリはどの環境にも割合高く生息し、これに次ぐ種類が環境のタイプによって変わり、自然度が高くなると種類が増えるだけでなく、一角を占める勢力になることがわきました。

なお、今回の調査では山・丘陵や林地、水田・湿地・河川敷での観察情報が少なく、自宅や庭・公園など市街地からの報告が総観察数の約2/3を占めました。それが、実際に山・丘陵などでは生息数が少ないのか、あるいはカマキリの姿を見つけていなかったからなのかは定かではありません。自宅や庭・公園以外からの報告がもう少しあってもよさそうだと思うので、それらの発見数を増やすためには、調査のしかたを改良する必要がありそうです。

### 宮崎県でオキナワオオカマキリ発見か?

宮崎県の市街地から送られてきた観察情報の中に、オオカマキリの仲間の幼虫の写真がありました。それを見ると、腹部先端だけをU字に曲げて直立する姿勢や胸部の長さが、オキナワオオカマキリの幼虫に酷似していました。オキナワオオカマキリは奄美諸島・徳之島が分布の北限ですが、昨今、九州南部ではツマベニチョウやベニトボンが北進していたり、大型のカマキリ類が庭や公園などで見られることを考えると、オキナワオオカマキリの分布北上、市街地での生息の可能性も否定できません。そこで急遽、宮崎県内のNACS-J会員に追加調査を呼びかけるとともに、学術協力者の槐真史さんが現地に出かけました。しかし、観察報告があった場所を含め、宮崎県南部から鹿児島県佐多岬までオキナワオオカマキリの成虫は見つけられませんでした。今後は、地域の方々の目に託したいと思います。

### 北海道にカマキリは自然分布するか?

北海道では従来、函館周辺からオオカマキリ類の報告がありました。そもそも北海道にカマキリが自然分布するかは諸説あり、最近になって札幌周辺でも発見されたことから、地球温暖化の影響で北上か?などと今日的な話題に結びつけた報道がされています。これに関しては、著名な昆虫学者・小熊捍さんが『新昆虫』(1949)という雑誌に興味深いことを書き記されています。「染色体研究の材料としていろいろの人に頼んでカマキリの卵を手に入れ、孵化させた幼虫を北海道大学の庭に放ったところ、たくさんの成虫を得ることに成功した。それによって、多くの成虫は土地に根つき、昭和初期(1940年代後半)には札幌を中心に相当広がった」(要約)。また、「カマキリの異常染色体」(1920)という論文では「札幌周辺では現在まで記録はないが、唯一函館ではオオカマキリ属の一種が記録されている」(要約一部改変)と述べられています。

こうしたことから、札幌のものは放虫・移入由来と言えそうですが、函館のものはたして自然分布なのか、国内貿易の有名な港であり、江戸期に持ち込まれたことも十分考えられます。

### カマキリをとおして環境の変化を読みとろう

カマキリは主に肉食で、他の昆虫に比べて個体数が少ないため、環境の変化による影響を受けやすいものと考えられます。今回得られた情報をもとに年ごとの変化を追っていけば、環境指標としての役割を担うことができるでしょう。もしもある時からカマキリの姿を見かけなくなったら、それが環境悪化のサインになるはず。自宅の庭などごく身近な場所ですっきり観察できるので、毎年続けて深く観察してみましょう。

